

第3回尼崎市生物多様性地域戦略策定部会 議事概要

日時 : 令和5年1月31日(火曜日)午後2時00分から午後4時00分まで
場所 : 尼崎市役所中館 8階 8-2 会議室
出席委員 : 5人
傍聴者 : なし

○開会

- ・定足数の確認
- ・資料確認

○議事

議題1 生物調査の結果(速報)について

事務局 :

—参考1について説明—

部会長 :

説明についてこれは間違っているということなどがありましたら、お願いします。

ないようでしたら、私から発言させていただきます。この中にまだ群落の断面図のようなものは入っていません。例えば、佐璞丘なら佐璞丘にどのような植物群落分布しているのかを示す代表的な植生断面図を描き、そこにチビクワガタがいるというように示します。報告書に入れるようにしてください。また、イシガメがいるならイシガメがいる環境は植物群落とどのような関係にあるなど、地点の様子を示していただければと思います。そうでないと、確認された種を示すだけでは生態系として、群落としてどのようなつながりがあるのかわかりません。その辺りも最終的に報告の中には入れてください。

他に、何かありませんか。

委員 :

ヒアリングの結果などを反映していただいております。

細かいことで申し訳ありませんが、最後の197ページの昆陽川、庄下川中流部というこの赤い区域の所にもメダカがいます。庄下川との合流点の少し手前です。それも入れると、ここの位置付けがより明確になると思われました。

部会長 :

手前というのは、下流ですか。

委員：

昆陽川と庄下川中流部に合流地点があります。その昆陽川の上流側です。

部会長：

調査対象にはなっていませんが、ここにもいますか。

委員：

そうです。聞き取り情報も入れると、この図がより生きると思います。あと、148 ページですが、これも今年、私たちが調査する中で見つけたものになっていますが、庄下川でアカザが見つかっています。写真も持っています。庄下川は武庫川から導水しているので、それが流れてきているのだらうと思いましたが、現状としてそこに生息していたということで、注目ランクを上げてもいいと思いましたが、細かいですが、生息という意味ではその2点についても反映していただければと思います。

部会長：

今回、チビクワガタが見つかっていますが、他の所では見つかっていませんか。

委員：

チビクワガタの情報は把握していません。基本的には見つけにくいです。

部会長：

ここではかなり個体数は見つかりましたか。

事務局：

調査上、確認できればそれ以上探さないのので、個体数の確認はしていませんが、2カ所で見つかっています。

部会長：

倒木のあった所ですね。

伊丹市では数百頭を同一の場所で採集しました。

事務局：

1カ所見つけられれば、周辺を複数掘れば複数個体を確認できる可能性がありますが、今回の調査ではそこまで踏み込んでいません。

部会長：

そうですね。採ってしまえば全て絶滅してしまいますから。

事務局：

採取できたのは2カ所ですが、そこでもっと探せば個体数は増えると思います。

部会長：

他に何かありますか。

委員：

現況の調査の所のエコロジカルネットワークという言葉とそれが指すものについてですが、現況調査の中ではネットワークに既になっている所を調査しているということになっています。これが、もし現況でエコロジカルネットワークを形成している拠点となっていることを表したいのであれば、エコロジカルネットワークに含まれるものの中には、単体ではないネットワーク機能がどう発揮されているのかという記載があったほうがいいと思います。成徳小学校だけではないですが、その周辺も含めることで、これだけの生物相が確保できているというような記載がないと、ネットワーク機能の効果があるのかないのか分かりづらかったです。

現況調査を通してですが、それぞれの場所で鳥類や昆虫類などに分けて、それぞれに課題を書いています。例えば、昆虫相は特に対策の必要がない、現況がよい状態であると書いてありますが、同じ調査場所で、ウシガエルが確認されており、ウシガエルへの対策をしないと昆虫を食べてしまうので、問題があると書いてあります。だとすると昆虫相には問題があることになります。一つずつの項目に課題を同じ場所に対して書くのは難しいのであれば、その調査地点全体でまとめた分析・評価をしたほうが分かりやすいと思いました。

部会長：

ありがとうございます。そうすると、126 ページのエコロジカルネットワークの書き方の問題ということです。

エコロジカルネットワークは、既にネットワークができているものもあれば、これから作っていくというものもあると思いますが、計画論に持っていく際に取り上げた方がよい、調査地点の設定段階では、エコロジカルネットワークという言葉を使わないほうがよいのかかもしれません。実際にネットワーク機能があったとしても、個々の調査地点に対して分析・評価が行われてしまっている、このような認識で合っていますでしょうか。

委員：

そうです。ただ、ネットワークという言葉を使っていけないかということ、そうではないと

思います。既にネットワークができていて、それを説明するような書きぶりになっていれば、今あるネットワークをさらに充実させていく内容につながられると思いました。

部会長：

要は緑地の連携のようなことですね。

委員：

そうです。

委員：

ここの結果だけではその分析がされていないということですか。

委員：

そうです。

部会長：

文章の書き方を少し考えてください。

他に意見はありますか。

委員：

今のネットワークに絡んでです。私も全く同感です。エコロジカルネットワークというと、ここに挙がっている要素全部がネットワークの核であり、199 ページでそれがどのように連携していて、なぜそれがそう連携しているのかを示すのがネットワークを分析・評価するという意味だと思います。その意味では、ネットワークの評価としてトンボと鳥が挙がっていますが、もう少しいろいろな指標を入れるべきではないかと思います。構成要素として緑地などを挙げていますが、現況調査の内容はさておき、このネットワーク図では面積などを重ね合わせた形でしか表現されておらず、現況調査の内容を細部にわたって反映させた示し方をしないと本来の意味でのエコロジカルネットワークの状況は示せていないと思います。

部会長：

ありがとうございます。他に何かありますか。

委員：

話が変わりますが、説明でいろいろな表が出てきた中で、出典の中で文献による分類調査の確認という記述がありますが、過去の資料が根拠資料となっていたり、直近のもので 2020 年のものなど色々とありますが、古いデータの情報が本当に現状と一致しているのか、信じ

難しいところもあります。現認や直近での聞き取り調査で確認されているものは使えると思いますが、それ以外がどこまでこれを信じて最終的に保全の方向性に持っていくかというのを整理したほうがよいのではないのでしょうか。

事務局：

今回の調査では、10年間で1つの目安として、その期限内で確認された生物は把握できた生物として数えています。

委員：

10年間と最初に説明がありましたが、部分的に武庫川を調査したのは2012年以前のものを使うと書かれていましたが、それよりももっと古い年代のものも書かれているところもあったような気がしました。その辺のところ、10年以内のデータであれば存在するというので整理されているのであればいいと思いますが、一目見たときにその辺が分かりやすくなっていたらいいと思います。例えば、文献と現認と両方が結果として残っている所だったら、現地で現物を見たことが分かるように書かれているほうが一目見て分かりやすいと思いました。

事務局：

把握している種がどのようなものが分かりやすくなるように整理したいと思います。

委員：

お願いします。

部会長：

個々の調査で最新のデータを集められたらいいのですが。

委員：

それはなかなか難しいですね。

部会長：

はい。今、どこまで古いデータまでさかのぼるかということで、一応、10年としましたが、武庫川などは過去10年では調査が行われていないので、古いデータを用いています。

事務局：

武庫川については、当初は既存データがあると思っていましたが、陸域のデータが足りていないことが分かりました。水域の現地調査は行いましたが、植物相調査などは行っていな

いため、来年度に1地点の補足調査を行いたいと考えています。

委員：

なぜこのようなことを言ったかという、175 ページの表 4-4-1 のところで、河川・運河の列にアユと書いてありましたが、既存調査を見ると武庫川の所にアユは丸が付いていますが、2011 年以前は丸が付いていて、12 年以降では文献調査でも出てきていないのかなと思います。今、いるのでしょうかけれど、本当にアユはいるのかなと思います。武庫川はよく河川工事をしています。頻繁に工事が行われているとアユなどは上ってこないのではないかと思います。そのようなところも、最終案をまとめるときは、武庫川は兵庫県が管理する 2 級河川なので何とかなるかもしれませんが、国が管理する 1 級河川については、なかなかそのようなところも手を出しにくいのではないかと気もしたので、意見を出しました。

部会長：

ありがとうございます。エコロジカルネットワークに戻りますが、ここで使っているエコロジカルネットワークとはどのような意味ですか。

事務局：

当初、調査場所を設定する際に、緑地と緑地をつなげるときに、街路樹や緑道のようなものでつなげるのが現実的なところだろうと考えました。126 ページで示している場所は、長さがあるような緑を選んでおり、実際にこのような緑地に生き物が行き来できるのであれば、実際の取組としても検討できるのではと考えておりました。それで、エコロジカルネットワークの機能がこのような場所にあるかどうか確認するために設定しました。また、今回の調査では、大きな緑の近くの緑の場所についてはエコロジカルネットワークとして設定しているので、大きな緑の場所から生き物が行き来している形跡があるかどうかを確認してみましたが、使われている形跡がないというのが、今回の調査の大まかな感触でした。

199 ページで示している図は、大きな面積のある核になるような緑と、その周辺に補足的、補助的に使われる場所をきちんと設けることで、核になっている緑地空間をもっと保全していけるのではないかとこの考え方でまとめたものとしています。

部会長：

現実に尼崎市の自然は、佐璞丘にしる猪名川自然林にしる、すべて孤立しています。

全く、ネットワーク化もされていないという現実がありますが、そのような現実に対して、孤立しているのはよくないので、ネットワーク化させようというのが、エコロジカルネットワークということだと思います。ただ、先ほど発言があったように、現状としてネットワークという言葉が出てくるのは少し違和感があります。方向としては、ネットワーク化させな

いといけないというのはあるから、計画論の中ではどんどん言わなければいけないと思います。でも、そのときに、ネットワークができるかといったら、佐璞丘と猪名川自然林は近いですが、そこを何かで結ぶというのは現実には難しいです。だから、尼崎市でネットワーク化を考えるとときには、水を使うことを考えます。河川を使ったネットワークです。実際に水辺の植物で、全体的に虫もたくさん入っているし、魚類も貴重なものが確認できているというので、水の流れを踏まえたネットワークも一つの考え方かと思います。緑は緑で、例えば猪名川と藻川の堤防などはもう現実につながって完全にネットワーク化されていますから、うまく活かせばいいと思います。

委員：

調査の課題設定としてはいいと思います。エコロジカルネットワークがきちんと現況としてあるのか、ないのかという課題を確認することはいいと思いますが、示し方や分析の仕方をもう少し分かりやすくしたほうがいいと思います。ネットワークになっていると考えて、調査地を設定し、調べたけれども、全然ネットワーク化されていなかったから、それを今後の計画でネットワークを形成していくようなことを施策としていくという流れで計画していただけたらいいと思います。

部会長：

佐璞丘はまさにそうだと思います。完全に孤立しています。あそこで何かネットワーク化させようと思ったら、猪名川自然林の草地を使ったネットワーク化ということが思い浮かびます。横にすぐに猪名川自然林が走っていますから、草原植生などでもネットワーク化できるということがあります。

それと、哺乳類は出てきませんが、カヤネズミなどは絶滅危惧種に入っていないですか。

部会長：

国土交通省の猪名川河川事務所の調査ではカヤネズミは貴重種という扱いになります。カヤネズミがいる場所は保全しようとなり、尼崎市も何か所もカヤネズミが確認されていたと思います。

委員：

大阪府では、淀川とかそのような一部にしかいませんので、おそらく指定していると思います。兵庫県であれば他の場所にもたくさんいると思いますが、猪名川は大阪市との境ですので、猪名川でそのような貴重な生き物が見られるというのは、尼崎市の人にとってはうれしいことです。

部会長：

淀川でチガヤの調査をしています。そこでもたくさん巣をつくっています。だから、カヤネズミなどを入れておくと、オギ草原だとかチガヤ草原にカヤネズミが入ってくるという図も描けると思います。

ふとカヤネズミが気になりました。カヤネズミの重要性を少し調べてみてください。

事務局：

はい。

委員：

カヤネズミは中園橋で見えています。結構います。

委員：

巣しか見つかっていませんが、尼崎の森中央緑地にもいます。

委員：

哺乳類というのでは、キツネが猪名川、藻川にすみ着いているので、それを何か取り上げていただけたらうれしいと思います。猪名川と藻川を行き来していて、目撃例が多数あります。証拠写真も一応ありますので、よかったら提供します。去年、撮った写真があります。

ついこの正月の情報で、私が現認しているわけではありませんが、JR立花駅の西側のお寺の庭で見たという情報も聞いたことがあります。しっぽや顔とかを見て間違いのないだろうという状況でした。

事務局：

キツネがいることはヒアリングでお聞きしていましたが、具体的な場所を聞いていませんでしたので、場所が分かれば入れようと思います。

委員：

私が見たのは中園橋の下で、夜、歩いていました。写真に写っているのは、園田競馬場の東側の猪名川の河川敷です。

部会長：

個体群として維持できるのでしょうか。

委員：

どうでしょうか。それでも、数年間ずっと話題になっています。一部、餌付けなどをしていようようです。

部会長：

他に何か意見がありますか。

委員：

23 ページにいろいろな保存活動をしている団体の一覧がありますが、「チャンネルガイド」という運河の活動をしている団体があるので、そのようなものも入っていてもいいのではないかと思いました。

それから、実際の状況をどのように確認したらいいかは分かりませんが、23 ページの真ん中より少し下、尼崎の森中央緑地の欄に「尼崎南部グリーンワークス」と書いてありますが、もう 10 年以上活動をほとんどしていないのではないかと思います。

それからその下の「NPO 法人尼崎 21 世紀の森」の概要ですが、この方たちは森というのは実際に木が生えている森の話ではなく、自然の豊かな地域のようなものを作ろうとしている方たちなので、実際、緑化をしたりではなく、まちづくりとか地域づくりとかそのような感じのことをしている方たちだと思います。

部会長：

環境を指標する生物ということで、175 ページにヒメボタルが出てきますが、ヒメボタルの生息環境は何群落かというのをまとめておいてください。

ヒメボタルのいる環境というのは何群落ですか。伊丹市の場合はクズです。

委員：

クズではありません。あえていえば、ヤナギ群落です。

部会長：

カナムグラとかつる性の植物が茂っているような感じになっていませんか。

委員：

もちろん林床には生えています。基本的には林になっている場所にいたと思います。今はもう伐採されてしまい、少なくなりました。

ここ 2 年くらいは、堤防の法面の堤内側に発生しています。そこは、外来のイネ科の植物が繁茂しているような環境です。

部会長：

今までヒメボタルというと、森林性のホタルで原生林に生息している認識でしたが、猪名川ではクズ群落などに生息しているので、その群落をきちんと書いておいたほうが良いと

ということです。

これから生物多様性地域戦略を策定していく中で、尼崎市のシンボル昆虫として、ヒメボタルなどは最適だと思います。ヒメボタルの場所や植物群落の推定は他の委員にも聞いていただき、計画に入れてください。

事務局：

一応、分布図と植生図があるので、そういった面では対応は出るといえば出ますが、かなりいろいろな群落が入ってきます。

部会長：

堤内側の堤防にいるのですか。

委員：

堤防の法面にいます。この2、3年はそこで多く見られています。

それから、今の175ページでは、猪名川や藻川を代表する昆虫と書かれていますが、年配の方の聞き取りと現況調査を含めると、ここは昔から生息していた場所ではないようです。昔からいたのは、やはり農業公園の竹林です。今も農業公園の竹林にいますが、堤内側の樹林地が正しい生息場所だったと聞いています。その辺は誤解を招きかねないという気はしました。

部会長：

伊丹市では軍行橋下流のクズ群落に生息し、そこが分布の中心になっています。そこから流されたりして尼崎市で確認されています。ヒメボタルというと、先ほども言ったように、原生林というイメージがありますが、尼崎市で確認されているものは何か違うようです。

委員：

確かにそうです。圧倒的に河原のほうが多いです。

部会長：

猪名川自然環境委員会でヒメボタルが出ると、ヒメボタルはもともと森林性で河川にはたまたま入ってきたから、河川に出ても別に工事してもいいという話になります。今はもう河川が中心だから、それは違うと、河川を破壊されると困るという話をしています。

委員：

そうです。実際に幼虫調査でも個人の方が参加しており、河川敷で幼虫がたくさん見つかります。

部会長：

人と自然の博物館の先生の話によると、個体の大きさは、日本のヒメボタルで尼崎市の種類が一番大きいといえます。その意味からでもヒメボタルはシンボルとして重要です。

シルビアシジミは尼崎市にはいませんか。

委員：

過去に 1 回見つかったかもしれません。記憶はあいまいですが、猪名川の河原で見つかった可能性があります。豊中市では確実に見つかっています。

委員：

尼崎の森中央緑地では数年前に確認されており、写真を撮ったものを新聞に載りましたが、ずっといるわけではないようです。

部会長：

シルビアシジミは、絶滅危惧種の A ランクですか。非常に貴重なものが猪名川水系にいる可能性があるということです。尼崎市でもたまには出てくることがあるかもしれません。この辺のシルビアシジミはシロツメクサをどうも食べています。本来はミヤコグサです。

ここに挙げているシンボルになる生き物については、先ほども言いましたように、どのような生態系にいるのかが分かる形でまとめておいてほしいと思います。

他に何かありますか。これ以外のきょうの議題もそうです。そうしたら、次の議題に行ってもよろしいでしょうか。次の議題をお願いします。

議題 2 将来像について

議題 3 方針・施策について

事務局：

－資料 1、2 について説明－

部会長：

ありがとうございます。今の二つの議題について合わせて意見をいただきたいと思います。どうぞお願いします。

委員：

将来像の前文の所になりますが、生物多様性をなぜ守らなければいけないのかということで、「食べ物やきれいな空気・水などの様々な自然からの恩恵に支えられており」と、書

いてあります。今、施策の最後でお話いただきましたように、生物多様性は、単に食べ物や水や空気など私たちが生活するためのものを提供してくれるだけではなく、気候変動対策としても関わってきます。気候変動対策あるいは防災、特に水災害では、水田の保全で雨水を貯留するなど、そういったこともやはり生物多様性の機能を使っています。尼崎市は森林がないかもしれませんが、森林には水源涵養機能があり洪水を防いでいる、抑制しているということがあるので、将来像の前文には、防災というか気候変動対策の面も含め、それこそ人間が生きていくために生物多様性を守らないといけないということが、もっと危機感を持って感じられるような書き方にしたほうがいいと思います。食べ物や空気、水だけだと、食べ物だったら地産地消で、水だったら隣の市から買ってきたらいいという話で終わってしまう可能性もあるので、生きていく上で絶対必要というニュアンスをもっと出したらいいと思いました。

部会長：

ありがとうございます。今、生物多様性というと、何か情緒的なイメージが強くて、本当はそうではないのですが、強力なものがありません。そこで最近言われているのが、今発言があったように、防災と生物多様性というのは一体化しているという言い方、防災とか環境保全、CO₂の問題にしても地球温暖化の問題にしても、それと生物多様性を絡めてしまうのが一つの方法なので、ぜひそれを入れていただいたらいいと思います。命に関わる、災害にもつながるということを強調していただいたらと思います。ありがとうございます。他に何かありませんか。

最後のスローガンのようなもので、「生き物と共生した四季を実感できる都市 尼崎」と書いてあります。いいですが、「生き物と共生した四季」というのはよく分かりません。「生き物と共生し、四季を実感できる都市 尼崎」としたほうが分かりやすいと思いましたが、私が考えているだけで、他の方の意見もあったら言ってください。これも含めて他に何か意見ありましたらお願いします。

委員：

まだ少し分かりにくいです。

部会長：

尼崎市という都市部において生物多様性に関する取組を行っていくには、なかなか難しいところがあって、なんという表現にしたらいいでしょうか。豊かな自然がある地域は、その豊かな自然を強調して何かスローガンとして出すことはあるのでしょうか。だから、尼崎市で出すと、こうなりたい、といったことになります。

委員：

「生き物と共生する」というのも、あまり一般の方にはなじみがないのかと思います。共に生きるとはどのようなことなのかという、特に尼崎市という都市部に住んでいて、環境保全活動に普段から関わっている方たちは実感しているかもしれませんが、大多数の今の尼崎市民の人にこれが響くかどうかよく分からないという気がしています。

委員：

私は逆に「共生した四季」という四季につなげていることで、何か感じてもらえるものが出ないかなという気がしました。「共生し、」で区切ると、言ってみれば、生き物の共生は共生、四季を感じるのには四季を感じるで、そこで切り離されているように見えます。あえてつなげて表現することで、共生した四季とは何だろうと考えてもらえると思います。

例えば、小鳥が鳴いたり、トンボが飛んでいる中でチェアリングをしている絵や、ピオトープで子どもたちが網を振り回している絵など、補足的なイメージを付けるといい気がしました。

部会長：

事務局としてはどのような意図ですか。

事務局：

将来像を読点で切ると少し長くなってしまいう印象があるのと、区切ると意味が2つに分かれてしまうというのがあり、「生物多様性」と「四季の実感」の2つを同時に実現するために、あえて読点を入れていません。

部会長：

確かに、「生き物と共生し、四季を実感できる」というのは、別にこれはどの地域でもそうだとということになります。ですので、先ほどのご意見のように、尼崎市の特性としてなかなかそのようなことはできないから、「生き物と共生した四季」というほうがイメージとしてはいいかしれません。それであれば説明できると思いますし、それが尼崎市の特性だと思います。自然が少なく共生も難しいですけれども、それを目指して進めていくという説明です。「共生し、」で区切るとどこでも通用すると言われると、「生き物と共生した四季」が尼崎市でしか通用しないというのは確かにそうかもしれません。

これについては意見を踏まえ、最終的な表現は事務局に後で判断してもらったらいと思います。

委員：

資料1の施策のアの所に関して、最後の行に『自然観察会を開催します』と書いてあります。私たち市民団体などが自主的に自然観察会を行っています、市が主導で開催するとい

う具体的な内容、それは次の段階だと思いますが、それをぜひ入れてほしいと思っています。例えば、自然遊び週間のような催しを設定して、市内小学校全校に告知し、そこでいろいろな所で自然遊びが同時多発的に行われるように市民団体に呼び掛けます。市が主導すると、一人ひとり全員に情報が行き渡るというメリットがあります。信頼度が上がり、間接的な支援策のようなものになるので、ぜひ具体的な例を盛り込んでほしいと思います。それはすぐに実現するわけではないと思いますが、実現につなげるために、市の職員や先生向けに市内でこのような活動が行われているという活動事例のプレゼンテーションの場など、推進側の人に理解を深めてもらう機会を設けると、市民活動をしている者としてはやりがいが出るという気がします。

部会長：

小学校等では学校教育として教育委員会が関わっています。大きな方向性として、例えば小学校 3 年生の環境体験学習というのは実際にあるので、その小学校 3 年生の環境体験学習をもう少し地元できちんと実施するようなことは検討できると思います。川西市は小学校区で環境体験学習を実施するように言っています。自分たちの学校区で、地元の自然を見るようにということです。伊丹市のある小学校では三田の有馬富士公園に連れて行っていました。しかし、それでは環境体験として身にはなりません。行くのは面白いかもしれませんが、やはり地域の自然を知らせるということを、小学校 3 年生のときにきちんとしていくということが大切だと思います。それぞれ身近な自然をきちんと学ぶという方向性を示せば、小学校も動くのではないかと思います。

あと、伊丹市の場合は、子どもたちに小学生向け生物多様性副読本「身近な生き物とわたしたちの暮らし」という冊子を渡しています。それは教育委員会が作ったのではなく、生物多様性戦略を作った部局が作成しています。

事務局：

本市の小学生も、3 年生に地域の代表的な自然として、猪名川自然林や尼崎の森中央緑地に行くことを先生が選べるようになってきていると聞いています。その辺りは学校に委ねられているところがあるので、もう少し身近な様子を知るようにということは検討できるかもしれません。

部会長：

どこの自治体でも、子どもたちにふるさと意識を持たせるとしていますが、そのためにどうしたらいいかというところまで書いていません。ふるさと意識を持たせるには、やはり少なくとも小学校区内くらいの地点、文化でもいいですが、それをきちんと伝えるような形に持っていかなければいけません。ですが、学校の先生にはその余裕がないので、結局、今までの慣例に従って場所を選んでしまうことになります。今、小学校 3 年生の環境体験学習

の予算自体は絞られてきているので、なかなかバスに乗って遠くに行くことはできなくなっています。その意味でも地元の自然を見るということが正しいということを言ってあげることも必要なことだと思います。

事務局：

冊子についてですが、戦略の概要版ではなく、今回の調査結果なども踏まえ、どのような生き物がいるか、虫取りの方法なども含めた啓発冊子を今回は作ろうと思っています。先生もどうしていいかわからないというのはおっしゃっていて、自然と文化の森協会のように体験プログラムがあると、お願いしやすいというのも聞いたことがあります。実際に生き物を採って、採れたものがどのようなものかが分かるような冊子を作成し、なるべく興味をもってもらいつつ取り組んでもらえるようにできればと考えています。

部会長：

川西市の場合は、各小学校区に一つくらいの割合で市民団体があります。その市民団体が子どもたちに教えてくれています。そのような市民団体が、尼崎市にもありますが、川西市ではそれが非常にたくさん存在しています。それぞれの小学校を預かってもらえるようになると、その地域の自然をきちんと伝えることができます。そのような指導者の養成のようなことも必要です。教育委員会がそのようなことをするかというと、教育委員会の中に社会教育と学校教育がありますが、これは全く関係がなく独立的に進められています。本来であれば、社会教育と学校教育の連携のようなことをしなければいけません。その部分について、尼崎市はどうですか。文化財などは市長部局に移りましたか。

事務局：

教育委員会に歴史博物館という部署があります。

部会長：

社会教育とか。

事務局：

社会教育も教育委員会です。

部会長：

私は川西市の教育委員会にいましたが学校教育が主体でした。社会教育と学校教育の連携を目指すものがないと、なかなか子どもたちに指導することはできないと思います。

委員：

私も職場のある寝屋川市で活動していますが、やはり小学校などの先生は、本当にどうしていいかわからない状態にあります。小学校の先生が必ずしも自然や理科のプロではありません。結局、そのような人たちがうまくできないので、なかなか学校現場ではこのようなことを体験させるのは難しいかと思います。小学校の先生を育てる研修のようなこと、本当は尼崎市にも自然史を扱う部局があるといいです。

例えば、博物館のようなものです。それほど大層なものでもなくとも、伊丹市の昆虫館のようなものです。そのような市レベルで何か市内の自然環境や生物多様性を扱える団体や部局の創設というのも考えられます。生物多様性地域戦略をしっかりと考えて、これからこのようにしていこうというときに、そのような専門に扱う部局や施設を考えていくといいと思います。

部会長：

大体、どこも皆そうです。歴史系は充実するけれども、社会教育の中でどうしても自然系は不十分です。同じ文化財なのに、尼崎市に天然記念物はゼロです。他の文化財はありますが、天然記念物が文化財ということを忘れられてしまっています。

委員：

そのようなことも、施策の中に書き込めるかどうかは難しいかもしれませんが、将来的にはそのような創設を目指すとしないと、生物多様性の認知度やそのような活動に参加する市民の割合は、多分、増えていかないと思います。だから、その中心となる団体、施設がないといけません。そこがやはり拠点になって、そこに人が集まってくるというのが、よそではそうなのではないかと思います。

部会長：

だから、伊丹市には昆虫館があり、西宮市にはそのような施設が三つくらいあります。尼崎市にはそのような施設が一つもありません。もしそれが不可能であれば、尼崎の森中央緑地と連携し、職員を1人くらい派遣して何かするなど、いまさら新しいものを作るのは無理かもしれませんが、何か生物多様性センターのようなもので動かさないといけません。川西市は人口15万人でそのような施設はできませんが、今度、川西市の黒川という、日本一の里山にそのような施設を造ります。初めから指定管理でなかなかできないかもしれませんが、何とか作ろうとしています。その辺もどう書くのかは難しいと思います。

委員：

市民レベルでは、子ども向けの環境学習でも、猪名川自然林で1回学習し、猪名川自然林で採った種で森を新しく作ろうとしている尼崎の森中央緑地を、両方見に来るというのを幾つかできています。自然と文化の森協会の方と連携をして、実際にプログラムとしても取

組んでいます、そのようなことをきちんと仲介してくれるようなところが市の中にあると、もっと市民団体のレベルでいろいろな活動が出てくると思います。

それからもう一つです。2ページの施策2の3つ目のポチですが、「尼崎市に森林はありませんが」という表現が気になりました。これは5分類したときの森林ではないという定義があるのだと思います。尼崎市は樹林であって森林ではないということで、このように書いているのだと思いますが、一般に見ると、樹林も森林もそれほど区別していないと思うので、森林がないと言われると少し寂しい気がします。

部会長：

そうです。佐璞丘は十分、森です。だから、「大規模な森林はない」という表現を検討するべきでないでしょうか。

委員：

施策ウの1つ目の中点ですが、1行目の最後の所、「外部からの補助金に依存した取組などになりやすい」と書いてあります。今、いろいろな補助金がたくさんあるので、そのようなものに頼っているのは継続性がなくてあまりよくないという意味に取れてしまいます。それよりももっと積極的にそのようなものを使ってどんどん活動が活発になっていくことがいいことだという書き方にしたほうがいいと思いました。

事務局：

今までの話でよくあるのが、特定の場所に希少種がいるということで、何かしたほうがいいのではないかと一時的に盛り上がり、したほうがいいことはいろいろと教えてはいただけますが、具体的にどうするか、誰がするかということになると、話がどうしてもうまく進まないときがあります。きちんと費用面や専門的なノウハウも含めて、活動として成り立つような事例がなかなかありません。ですので、まずはこのようなことを考えておかないとうまく進まないとか、このようにしたらうまく行くということをきちんと参考事例としてまとめていきたいと考えています。

取組における初期費用として、補助金使うことはあると思いますので、この表現は見直したいと思います。

部会長：

市民団体は活動ができて、書類の書き方で分からないことが多いです。ですので、行政が代わって対応してあげています。助成金を採ってあげているという方法を採用しているところもあります。外部の助成金はそれなりに重要だと思います。上手な書き方を考えてください。

事務局：

はい。

部会長：

あまり時間がありませんので、他にありませんか。

委員：

私は市民の代表ということなので、資料 1 の最後の将来像の最後を書いてある、最初に話題になったところですが、『生き物と共生した』と書いてある生き物について質問します。一般市民からして生き物といったら、鳥類であったり昆虫であったりという気がしますが、そうではなく、植物も含めた全てだと思っています。この辺が、一目見て、一般の人はわかりにくいのではないかと思いました。これが一つです。

それと、方針施策の所ですが、ここも方針③で、指標で地産地消と書かれていて、地元の野菜を販売していくというところがあります。この販売は、例えば、飲食店で積極的に出すというのあれば、もっといろいろな人に触れてもらえるのではないかと思います。そこも含めて表現、説明をしてもらったらいいと思いました。以上です。

部会長：

ありがとうございます。またその辺、検討してください。

事務局：

はい。

部会長：

他に何かありませんか。

委員：

先ほど、ネットワークに関するやり取りでも言い忘れたと思っていたのですが、3 ページ目の方針 2 の施策アです。前の回でも出たかもしれませんが、水路という文言がどこにも出てきておらず、ネットワークの所でも先ほど部会長から水辺のネットワークという言葉が出ました。管理組織がかなり特殊なので非常に難しいとは思いますが、ぜひ水路を取り上げてみてほしいと思います。

部会長：

先ほど、猪名川を通じて魚が市内に入ってきている、まさにネットワーク化しているということでした。ですから、水路のネットワークということを考えて、尼崎市の特色としては、

小さい水路にも意味を見いだしているという、尼崎市の特色を出せるようなことを一つ書いたらいいと思います。

それともう一つ、後ろの『緑化の推進』というのがあります。ここはそれこそ尼崎市しかできない遺伝子の多様性というか、地域性苗木に基づいた緑化の推進です。だから、思い切り踏み込んで遺伝子の多様性を考えた緑化という形で打ち出しても、尼崎の森中央緑地がある尼崎市なら可能ですので、ぜひここでその特色を出したらいいと思います。

事務局：

事例がいろいろあるということでしたので、ご意見を踏まえて検討したいと思います。

部会長：

それをしたら、全国の市でそこまで踏み込んだという一例になります。

他に何か言い残したことがありましたら、時間がぎりぎりですが、お願いします。水辺の魚などでご意見はよろしいですか。

委員：

水路を入れるというのは本当に大事なことだと思います。水路のネットワークという問題という意味でいいと思います。

部会長：

よろしいでしょうか。それでは、かなりいろいろな問題が出たと思いますが、整理し、またまとめてください。事務局に返します。

事務局：

本日は長時間にわたる議論ありがとうございました。今後の予定ですが、この策定部会については、本年度はこれで終了になります。第4回部会は令和5年4月以降になる予定です。日程調整等については、また事務局から連絡しますので、ご協力をお願いします。資料等については、その日程の1週間前をめどに送付しますので、また目を通して活発に議論いただきたいと同時に、専門的事項については事前にお聞きすることがあるかと思いますが、そのときにもまたご協力をお願いします。本日はありがとうございました。

以 上